

扶助者聖マリアのノヴェナ

3日目 (5月17日 月曜日)

様々な声に耳を傾ける

⁴⁷ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。

<コメント>

碑文谷： 碑文谷教会は、教会も感染防止に努めながら、教会の主日のミサもよそから来られる信者さんにも開放しています。いろいろな状態に陥った教会の在り方をその方々から知ることができます。

そのような環境の中、排斥せずに沈黙の中、私たちは今の世の中の在り方を思いめぐらします。(山本)

調布： サレジオ神学院の調布オラトリオに集うベトナムの若者たちにとって、毎月一回のオラトリオはベトナムの若者の信仰の拠りどころとなっているようです。ミサ、信心会、ゆるしの秘跡、相談会、レクレーションなど、来日して働いている若者たちの交流の場になっています。日本語を上手になりたい、日本の学校で学びたい、新聞配達をしながら学んでいる男女の学生もいました。日本で暮らす淋しさや孤独を、ベトナム人同士が集うことによって慰めあっているということもあるかもしれませんが、明るく活気に満ちた態度はとても好ましく、喜びと希望に満ちているように感じます。神学院の庭の手入れや、ユースセンターの手入れなどを手伝いながら、仕事と勉学に励んでいる様子を聞くと、ほんとに応援したくなります。

また、今年の四旬節、調布教会の福祉部会ではコロナ禍での支援が何かないだろうかという話合っていました。そんな中で、コロナによってひとり親世帯の急増、リストラ、生活の困窮者が増えていることを知り、ユースセンターの一室にあるフードバンク調布がその困窮者に食料品を支援しているということを知りました。

今まで、フードバンクがこんな身近にあるのにその活動がどんなものであるのか知りませんでした。コロナを体験したことによって聞こえてきたフードバンクの活動、そして助けを求める人々の声を知ることができました。

(藤永)

土浦： 70歳の定年を迎えるまで、約60年扶助者聖母のもとで過ごすことができた私は今更ながら本当に幸せでした。ベビーブームの中で生まれ、学校も4部制であることが分かり、母が見つけてくれた学校がサレジオンシスターが経営する星美学園だったので。その頃は東京の小豆沢というところに住んでいました。30分ほどの徒歩通学でした。中学の時に受洗し、現在があります。聖母に支えられていることが喜びです。私の友人はほとんどが東京ですので、今は、LINEや電話で情報交換をしています。お互いに励まし合っています。幸いなことに信者の友人も多く、お互いの教会の現状を話したりもしています。(江口)

浜松：岡部 浩典

私は労働者の健康管理の仕事をしているので、職場で体調を悪くした人の悩みを聞くことが多い。しかし原因は必ずしも職場にあるとはかぎらない。むしろ、本人の慢性疾患や難病であったり、夫婦関係や子供の教育に悩んでいたりと、親の介護疲れであったり、金銭的問題が原因であったりと、多岐にわたる。一人の人間の「公と私」はつながっており、どこかで問題が生じると、大なり小なり、食欲低下・不眠・頭痛・倦怠感など健康上の問題となって現れ、ひいては就労にも影響が出てしまう。

この1年間、原因不明の体調不良を訴える相談者が増えた。医療機関を受診しても原因がわからない。仕事を失ったわけでもないし、家庭環境にも問題はない。本人も思いあたるところがないが、辛くてたまらないという。

睡眠時間はどれくらい？食事は摂れている？休みの日の過ごし方は？友人との関係はうまくいっている？と、慎重に生活状況を尋ねていくと、その中で見えてくるものがある。コロナウイルス感染症の流行によって、人と人との対面での交流が「悪」となってしまった。自分のため・家族のため・会社のため・社会のために、マスクをつけ、人との関わりを避けるようになり、知らないうちに追い込まれていたのだった。

一方、コロナ禍で以前より元気になった人たちもいる。以前は、わがままだとか、空気が読めないとか、怠け者だとか言われた、いわゆるコミュニケーション障害を持つ人たちである。ソーシャルディスタンスによって、彼らは周囲からの過剰な干渉から守られることになった。

双方の話を聞いていて、気が付いたことがある。神様は、人が交わること、違いを認めてお互いを尊重することの両方が大切であると教えているのではないかと。相談者の悩みを聞くとき、以前は、時に無力感から苦痛を感じることもあった。今はむしろ、彼らの言葉が自分への神様からの語りかけに思える。私は、それを聞き続けたい。

ガビ・ナガミネ

様々な声に耳をかたむける。

扶助者聖マリアへの私の信心は、私の主人の姉妹から来ています。彼女はペルーのリマにある扶助者聖マリア学院で勉強しました。彼女は扶助者聖マリアに大きな信頼と信心を持っていました。

私が主人に出会った時、彼は既に病気にかかっていた。私の中では、病気の彼に寄り添っていかなければならない、と言う声が聞こえていました。もし、私が彼を幸せにすることができるのなら、私は彼と結婚します。私が考えていたことは、ただ彼が幸せになること。気持ちよく過ごせることでした。

結婚して2年後、病院の先生は彼の命があと6ヶ月しかもたない、と言いました。私は23歳。どうしたら良いか、わかりませんでした。誰にも相談できなかつた。彼が見ていないところで毎晩涙を流しました。そして祈っていました。扶助者聖マリアに、彼の病気を治してほしいと願いました。医師が言ったもう一つのことは、子供はつくれないということ。私は全てマリアに委ねました。2年後、私は妊娠しました。それが、私にとって、彼にとって一番大きな祝福でした。

主人は心臓の手術を2回うけました。2回とも上手くいきました。私はいつも扶助者聖マリアに祈っていました。そのマリア様が、この34年間の結婚生活を支えてくれたのです。彼が天に召される日まで。

私の主人も、リマのサレジオ会のドン・ボスコ学院で勉強しました。これが私と扶助者

聖マリアとの絆です。キリスト者の助けなる聖マリア、私たちのためにお祈りください。

<扶助者聖母マリアのご像の紹介>



●聖母像建立



●聖母像建立工事を終えて



●富士の聖母像

富士の聖母像 (カララの大大理石)

1964年10月 富士山2合目半に富士の聖母像が建立されました。

ドン・ボスコとマードレ・マザレロの出会いから100周年にあたるこの年、聖母は日本のために思いがけないことを用意してくださっていました。

1962年マードレ・エルバが来日

され

富士山に聖母像を建てることについて考えをもらされました。色々なことがありましたが、サレジオ会の恵美神父様はじめ富士吉田市と地域の方々、世界中のサレジオ会、扶助者聖母会の方々の祈りと協力により完成しました。9月には厚生省の許可があり、10月教皇大使代理、多くの聖職者、県や市の方々、シスターや子ども達の感動に包まれて、聖母像の除幕式が挙行されました。現在は、2代目のマリア像ですが、今でも沢山の巡礼者が訪れています。

<最後の祈願 (ドン・ボスコが作成した扶助者聖マリアへの祈り) >

「おお、マリアよ、力あるおとめ、
輝かしい教会の母、
素晴らしいキリスト者のたすけ、
戦いにあって配置された軍勢のような力を持ち、
世界のあらゆる異端をうちこわし、
不安や苦難、
困難にあってから私たちを守るマリアよ、
私たちが死を迎える時、
魂を受け取り、
天国へと導いてください。
アーメン

<祝福>